

魚売り場

木下 順子

魚の顔はおもしろい。見れば見るほどますます飽きない。アジやイワシなどお馴染みの顔もいいけれど、欲を言えば、やたら馬づらだったり口がぱっくりと大きかったりするような個性的なやつはもっといい。笑えて楽しめるというだけではない。星や宇宙のロマンなどは理解しない私だが、魚の顔の、それこそ意味不明のブサイクさは、悠久の時間と空間とが生んだ奇跡であり、まさに夢とロマンと感動だと思うのだ。

とは言い過ぎかもしれないが、確かにによち歩きの小さい頃から海の生き物が大好きだった。私は生まれも育ちも福岡だが、もし市内の水族館がもっと早くできていたら、あるいはマリンスポーツにでも縁があったなら、あこがれのお魚さんたちに会いに通いつめ、今頃はちょっとした魚博士か名物海女になっていただろうか。しかしどちらにしろ、私のフィールドはいつも近所のスーパーの魚売り場だった。

母がスーパーへ連れて行ってくれる日は、部屋にこもりがちな私も嬉々として靴を履いた。スーパーに入ると、母は真っ先に魚売り場へ向かう。そして、選んだ魚を店員に預け、番号札を受け取った。その店員が魚をさばいてくれる間に、我々は他の買い物を済ませるのだ。だがお菓子を買ってもらえそうな日を除いて、私はそのまま魚売り場の前で母が戻るのを待つことにした。ヒラメの目、キンメの目、タコの目、ナマコのまなこ・・・あれこれのぞき込んでいると時間など忘れた。むしろ水族館で水槽越しに見る生きた魚より、死んでいても間近に見られる魚の方がリアルではある。それらはザルごと持ちあげて上か

ら下から斜めから観察でき、すきを見ては指先で腹の弾力やウロコの固さを確かめてみたりもできるのだ。

ちなみに私の実家は、特段海に近いわけでもない片田舎の新興住宅地にあるのだが、私が小さかった頃にはもう、魚専門店（魚屋さん）は近所に見あたらなくなっていた。だが、たいていのスーパーの魚売り場は、首都圏のそこらのスーパーとは比較にならないほど品揃えが豊富で、しかも結構なシェアを尾頭付きが陣取っていた。大方それらは裸のままで、氷の上に直接かザルにのせられ、すぐ手に取れるように陳列されていた。店によってはかなり大きな魚にもお目にかかれた。だからスーパーという小さなフィールドでも、いろんな魚たちと顔なじみになれたのだ。それから30年後の現在までに、実家付近のスーパーは激しく入れ替わり、大型化したし数も増えた。新しい環状線道路が近くを通った最近では、一層し烈な下克上の時代である。しかし幸い、魚売り場はまだ健在だ。むしろ新しいスーパーほど魚売り場のめくるめく世界をよく演出してくれているものが多いようにも見える。それがこの地域で競争に勝つための一つのポイントなのだろうか。確かに私の母は、魚売り場の善し悪しでスーパーを選んでる。特に数年前運転免許を取ってからというもの、うちから最も近いスーパーの前を通過し、二番目に近いスーパーも通過し、つぎに見えてくるまさに魚売り場が秀逸なスーパーへと、右折の恐怖をおしても行くのだと聞いている。

私は大学卒業後に独り東京へ出てきたのだが、こちらではほとんど切り身の魚しか見ることができない。尾頭付きがあればサンマとイワシぐらいで、それもしばしばパックの中だ。私としては全くつまらない上に、味にも値段にも納得がいかない。そのうち売り場に近づくことも稀になり、自炊はもっぱら肉料理をやるようになってしまった。そして昨年からは、蓄えた肉エネルギーをスキューバダイビングに注いでいる。空気タンクを背負い腰に重りを付け、命を賭けて本物の尾頭付きを見に行くのである。もし福岡にずっと住んでいたなら、出無精な私がギラギラの太陽の下で、こんなしんどい道楽にいそしむこともなかったはずだ。